

Snow Fairly Blade Works

千本虚刀 斬月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Heaven's Feelルートの終盤、イリヤスフィールは自身と引き替えに衛宮士郎を救い、門を閉じた。そこで物語は終わるはずだったのだが、何故かエミヤのデミ・サーヴァントと成り受肉（転生？）していた。

ついカツとなって書いた。

原作知識は結構大雑把。

いつエタるか知れない。

細かい突っ込みは無しでお願いします。

原作設定の変更、死亡キャラの生存、キャラの強化などあり。

# 目次

Heaven's Feel	1
衛宮	6
Archer	11
受験生	17
逸般人？いいえ、一般人です	22
ファツション	26
Unlimited Blade Works	31
剣の雪原	36
特異災害対策機動部二課	42
ようこそ！	47
ドキドキ？ワクワク？魔術講座 1	52
フィーネ	57
カレイドステッキ	59

# Heaven's Feel

「——ううん、シロウは死なないよ。だって、この門を閉じるのは私だから。」

それがアインツベルン一千年の悲願を、一族の歴史の全てを無為に帰す行いであるのはわかっている。

「——うん。良かった、私もそうしたかった。私よりもシロウに、これからを生きて欲しかったから。」

でも私はそれ以上に助けられたかった。この不器用で、危うい弟を。

「——じゃあ奇跡を見せてあげる。今度のはすごいんだよ。なんていったって、皆が見たがっていた魔法なんだから。」

例え血はつながっていなくても、お姉ちゃんとして弟のために身体くらい張らないとね。

「——ううん。言ったよね、兄貴は妹を守るもんなんだって。……ええ。私はお姉ちゃんだもん。なら、弟を守らなくっちゃ」

私は、自らを持って大聖杯の門を閉じる。

「さて、最後のお仕事といきますか。力を貸してくれる？シロウ」

私が「小聖杯」として唯一取り込むことが出来たアーチャーのサーヴァント、英霊エミヤ。平行世界においてアラヤと契約し、正義の味

方（カウンターガーディアン）となった未来の衛宮士郎である。

他のサーヴァント達は最後まで敗退しなかったライダーを除いて、黒い聖杯と化した間桐桜が取り込んでしまっていた。

『やれやれ、人使いの荒い姉さんだ。だが、弟とは姉を支えるもの。だから、オレの全てをイリヤに・・・』

そんな声が聞こえた。それはあり得ないはずのことで、もしかしたら単なる幻聴だったのかも知れない。だからだろうか、つい

「ふふ、ふふふ。あーあ、もしも生まれ変わることが出来るのなら、友達作って学生生活ってやつを送ってみたいなあ。」

と願ってしまった。小聖杯だった自分が、大聖杯の中で。

その願いがとんでもないカタチで実現するとは夢にも思わずに。

そうして、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンはこの世界から完全に消失した。彼女の物語はひとまず閉幕。

——さあ、終わりの続きを始めよう。

アーチャー

真名：イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

性別：女性

属性：混沌・善

備考：どう言う訳だかイリヤスフィールがエミヤのデミ・サーヴァントと成り受肉（転生？）した存在。彼の能力、技量、知識をほぼ完璧に引き継いでいる。格好はアーチャーをインストールしたときの

イリヤと同じ。

筋力：D      耐久：C      敏捷：B      魔力：B＋＋      幸運：B  
宝具：－

スキル

対魔力：C＋

魔術に対する抵抗力。魔術詠唱が二節以下のものを無効化する。  
大魔術・儀礼呪法など、大掛かりな魔術は防げない。

単独行動：A＋

自分の身体を持っているためマスター不在でも行動できるが、宝具を最大出力で使用する場合など、多大な魔力を必要とする行為にはマスターのバックアップがあった方が望ましい。

魔術：B－

基礎的な魔術を一通り修得している。加えて、アインツベルンの錬金術も行使可能。

魔眼：C

目を合わせた者に暗示を掛けられる。

心眼（真）：B－

修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。逆転の可能性が1%でもあるのなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手練り寄せられる。

千里眼：C＋

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。遠方の標的捕捉に効果を発揮。平時で4 km、強化すれば10 km先まで見て取れる。

聖杯：EX

イリヤの魔力で叶うことならば、自身がそのために必要な理論を知らなくとも過程をすっ飛ばして「結果」のみを現出できる。

狙撃：A

的中をイメージしてその通りに矢を射れば嫌でも当たる。

令呪：EX

マスターがサーヴァントに対して行使できる絶対命令権。ただし、曖昧な内用の命令ほど効果が薄くなっていく。イリヤのソレは特別仕様で、魔術回路と接続されているのではなく、魔術回路そのものが令呪。通常なら支配を弾きかねない程強力な英霊を律することが出来る。

メイド：A+

エミヤの執事スキルまで受け継いだ模様。

## 宝具

無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）

ランク：E〜A++

種別：????

レンジ：????

最大捕捉：????

錬鉄の固有結界。本来は魔術であり宝具ではないが、エミヤの象徴ということとで宝具扱いになっている。イリヤ自身の心象と混じり合い昇華されたため、晴れ渡る蒼穹と純白の雪原に刀剣類が乱立しているという心象風景と成った。

武器であるなら視ただけで行程（創造の理念を鑑定し、基本となる骨子を想定し、構成された材質を複製し、制作に及ぶ技術を模倣し、成長に至る経験に共感し、蓄積された年月を再現し）を凌駕し尽くし即座に複製し、貯蔵する。ただし、本来のものよりランクが一つ落ちる。盾や鎧は2〜3倍の魔力を消費する。

イリヤは守護者であるエミヤと違って、固有結界に世界からの修正力が働くなどのペナルティを受ける。

神造兵器の複製は、出来たとしても側だけの張りぼて。唯一の例外として「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」だけはほぼ完璧に再現できる。

全て遠き理想郷（アヴァロン）

ランク：EX

種別：結界宝具

防御対象：1人

不老不死の効果を有し、持ち主の老化を抑え、呪いを跳ね除け、傷を癒す。真名解放を行なうと、数百のパーツに分解して使用者の周囲に展開され、この世界では無い「妖精郷」に使用者の身を置かせることであらゆる攻撃・交信をシャットアウトして対象者を守る。それは防御というより遮断であり、世界最強の守り。

ただし、イリヤは本来の担い手では無いので真名解放は不可能だが、自身に対して令呪を使用した場合はその限りでは無い。

イリヤはこの鞘を体内に納めることで、漸く人並みの寿命と成長を得ることが出来た。

## 衛宮

キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、ホームルームが終了する。すると、二人の女生徒が声をかけてきた。名前は立花 響と小日向 未来。私が中学に入って直ぐの頃、この容姿や浮き世離れした雰囲気の所為で孤立気味だったところに声をかけてきたのがこの二人で、なんやかんやとあつて気が付いたら友人になっていた。

「イリヤちゃん、今日もアルバイト？忙しそうだけど、平気？」

「ええ、でも週末はちゃんと休みを取ってあるから心配しなくても大丈夫よ。」

「じゃあ3人でツヴァイウイングのライブに行けるんだね。楽しみだなく。」

ツヴァイウイングとは、天羽 奏と風鳴 翼の二人から成る今大人気のボーカルユニットである。

「でもイリヤちゃんも大変だよな。切嗣さんが亡くなってもう半年、あんな大きなお屋敷の管理を一人でしながらアルバイトまでなんて。」

「別にこれくらい慣れてしまえば大したことないわよ。普段は遠出するような用事も特にないし、二人がちよくちよく遊びに来てくれるから寂しくもないもの。」

「イリヤちゃん・・・」

「まったく、そんな辛気くさい顔しないの。明日スコーンでも焼いてきてあげるから元気出なさい。」

「本当!? やったー!」

「もう、響ったら」

「フフフ、まあこうじゃなきや響って感じじゃないわよね。」

そう、この世界において、何の因果かイリヤは切嗣に拾われて養子

となっていたのだ。此方の世界の切嗣は「魔術師殺し」の魔術使いではなく、国境なき医師団に所属していた。

その切嗣も半年前に亡くなった。ノイズ被害者の救助中に傷を負い、そこから感染症を引き起こしたのだ。残念なことではあるが、僅かな期間でも切嗣と親子として過ごし、今度はその最期をちゃんと看取ることが出来た。

優しい人たちに出会って、笑いあえる友達が出来て、他愛の無い日常を謳歌できている。それこそユメのような日々。

だからこそ願わずには居られない。この幸せがどうか続きますように、と――

ライブの当日、イリヤ達3人は客席で「ツヴァイウィング」の二人がステージに出てくるのを今か今かと待ちわびている。

「いや、すごい人気だね。満員御礼って感じ。」

「うん、はぐれて迷子にならないように気をつけないとね。」

「まったくね。（これ、念のためのつもりだったんだけど正解だったみたいね。）」

イリヤは今日のライブに備えてマルチインの聖骸布を投影し、リボン代わりにして身につけていた。士郎がアーチャーの腕を封印するために使っていた魔力殺しの聖骸布で自身の魔力を隠匿しているのだ。そして残念なことに、その心配がただの杞憂では済まなそうな気配が下から漂っていた。

漸く会場の照明が落ち、ツヴァイウィングが大量の羽根を振りまきながら宙から舞い降りる。スポットライトに照らされた二人はとても幻想的で、観客達をあっという間に魅了する。今の二人は正しく偶像アイドルと呼ぶに相応しく、確かに神秘を帯びていた。

古今東西、歌と踊りは様々な魔術や呪術、果ては神や精霊と言った上位存在との交信手段に用いられてきた。そう考えれば今の二人が

神秘を纏っていたとしてもあり得ないことではないだろう。それだけなら然程問題ではない。今、最も問題なのは

(下からすごい魔力を感じる。十中八九、宝具の現物たる聖遺物ね。まったく、何だってこんな所にそんな物が在るのよ!?)

しかもその魔力は、ツヴァイウィングの歌唱に共鳴してどんどん増幅されていくのだが、イリヤはそれに若干の不安定さを感じていた。(これ、ちよつと不味いかも。最悪の場合、暴走しかねないわ。どうしようかしら・・・)

イリヤは取り合えず、興奮しながらケミカルライトを振る未来と響にBランク相当の魔術障壁と物理保護をかけることにした。

(出来ればこのまま、何事もなく済んで欲しいものだけど・・・多分、そうもいかないでしょうね。はあく)

直後、会場の中心部分で爆発が起こる。更に、撒き散らされた高濃度の魔力に引き寄せられたのか、ノイズの大群が押し寄せてきた。イリヤは即座に聖骸布の封を解き、赤原礼装を纏う。

未来と響はノイズの所為でパニック状態の他の観客達に押し流されてはぐれてしまったのだ。イリヤは自身の迂闊さを責めながらも、干将・莫邪を投影する。後先を考えて顔バレ防止のためのフルフェイスヘルメットも着用する。

(手は打っておいたからそう大事にはならないと思うけど、ノイズの炭素転換にどこまで耐えられるかは分らない。何にせよ、先ずはこのノイズ共を片付けないとどうにもならないわね。)

ノイズには位相差障壁があるため、此方からは干渉しづらいがカウンター戦術は有効に機能する。イリヤは自身や他の人たちに襲いかかるノイズを片っ端から双剣で切り捨て、あるいは黒鍵の投擲で打ち碎いていく。炭素転換攻撃も当たらなければ意味はない。イリヤからすれば所詮有象無象でしかなく、かすりもしない。

「う、うわあああー!!」「キャ——!!」「助けてくれー!!」

視れば一番大きな出入り口に大型のノイズが4体、獲物を逃がすまいと立ち塞がっていた。

『つたくもう！全員、死にたくないなら伏せなさい!!』

イリヤは黒い洋弓に捻れた剣をつがえ

『我が骨子は捻れ狂う——カラトボルグエー偽・螺旋剣!!』

ノイズの群を空間ごと抉り穿った。

『今のうちに速く逃げなさい!』

観客達は我先にと逃げていく。イリヤは周りに眼を走らせると、人が粗方捌けた観客席で逃げ遅れた二人の少女が呆然としているのを見つけた。そしてその二人、未来と響に殺到するノイズを。

『?!?させ「させるかってんだ!!」・・・は?』

その光景はイリヤをして、思考に刹那の空白を生じさせる程のものだった。何しろツヴァイウイングの二人がアニメみtainなパワードスーツに身を包み、歌いながらランスと大刀でノイズの群を蹴散らししているのだ。

(ていうかあの槍ってオーディンの大神宣言?グングニルで、あつちの刀はスサノオの天羽々斬よね?彼の神槍・神剣をよくもまああそこまで魔改造したものね。)

とある違法コピーと不正改造の常習犯を全力で柵に上げて呆れ返っていると

「おいアンタ、誰だか知らないけど助かったよ。ありがとな。」

「貴方にはいろいろと聞きたいことがあります。後ほど、我々と同行していただきますのでそのつもりで。」

「相変わらず堅苦しいなあ、翼は。さて、ワタシ達のことは知ってるだろうから自己紹介は省かせて貰うとして、アンタのことはなんて呼べば良いのかな?」

『そうね、とりあえずアーチャーと名乗っておきましょうか。それよりも、その二人!惚けてないで急いで避難する!』

「は、はい!」

イリヤは未来と響に襲いかかろうとするノイズの悉くを射貫き、二人の退路を確保する。更には自身の防衛とツヴァイウイングの援護まで並列で行っている。伊達にエミヤのデミ・サーヴァントとなっているわけではないのだ。

一般人は全て退避し、ノイズの殲滅も快調に思えたが、急激に天羽

奏の魔力が低下しました。

「クッ！時限式はここまでかよ!？」

『ちよつと、どうしたのよランサー？急に調子がガタ落ちしてるみたいだけど。』

「どうやらドーピングが切れちゃったみたいだ。悪いな、大事なときに・・・」

『セイバー！ランサーを少し下がらせなさい。この手のタイプは周りが無理矢理にでも止めないと無茶し続けるわよ?』

「つでも、まだノイズが」

『残り私が片付けてあげる。特別サービスよ?つと、一応確認しておくけど貴女達の歌はノイズの位相差障壁を無効化できるってことでいいのかしら?』

「ええ、その通りだけど・・・!ノイズが、合体していく。」

ノイズの特性の一つとして、ノイズ同士の合体・分離も可能であり、それに伴い形態を変化させることもあるのだ。残存する全てのノイズが一体となったのだ。だがそれはイリヤにとっては何しろ好都合である。なにしろ散らばっていたゴミが一塊のデカいものになったのだ。

イリヤは再び螺旋剣を弓につがえ、弦を引き絞り、指を離し、静かに結果を見届ける。その射法八節は端から見ていた二人が思わず見惚れるほどに丁寧で綺麗なものだった。

そして二人が正常な判断力を取り戻す前に、全速力で駆け出した。数瞬の後、我に返った二人は追いかけてようとするが時既に遅し。その頃には空間転移で会場の彼方まで離脱を果たしていたのだった。

## Archer

あのライブでの事件から数ヶ月が経過した。あの一件は世間に大きな波紋をもたらした。ノイズによる直接的な被害者は少なかったのだが、それでも少なからず死傷者が出た。しかもその主な理由が逃走中の将棋倒しや避難経路の取り合いなのだからどうしようも無い。そしてもう一つの理由が、ある動画である。それは観客が撮影していた物で、イリヤがノイズ相手に無双し、螺旋剣でノイズの群を空間ごと抉り穿った場面までバツチリ映っていた。宝具の完全投影+公衆の面前での魔術行使など、もしこの世界にも魔術協会があれば封印指定確実のやらかしぶりである。

生存者へのバッシングは暫くすれば落ち着いたものの、当然今度は謎の少女についての考察および探索の流れになった。その当の本人は――

朝の5時、まだ空は暗い。イリヤはその時間に起床する。広い武家屋敷に一人暮らしなのだから勉強以外にもやるべき事はたくさんある。洗濯や朝食の仕込みに放課後のアルバイト、そして鍛錬。睡眠時間は驚きの平均4時間と常人なら間違いなく潰れるところだが、平気なのはデミ・サーヴァント故の耐久力と『鞘』の回復力の賜物である。あの一件でイリヤは痛感した。いかにデミ・サーヴァントと成ろうと、能力も技術も所詮借り物でしか無いと。あの時はツヴァイイングという想定外のイレギュラーのおかげで響と未来は助かった。だがもしも再びあのような事態に陥った場合、今の自分では守り切れないかも知れない。借り物の力を、本当の意味で自分の物にしなければならぬ。

屋敷には様々な結界を重ね掛してあるので多少の魔術行使ならば外に魔力が漏れることは無く、外出するときは聖骸布を身に付けている。表面上は一応の平穏を保っているが、そんなものは何時までも続くものではない。

今朝の鍛錬は道場で体術である。エミヤが習得していた武術は、八極拳を中心に空手、合気、サバット、システマ等の様々な流派を独自にCQCに昇華させたものである。それをひたすらに反復することで身体に直接覚えさせる。

2時間後、鍛錬を切り上げ、シャワーを浴び、朝ご飯を食べる。どんなに忙しくても食事はきっちり欠かさず食べる。単にルーティンや栄養摂取だけでは無く、美味しいものを食べると楽しいし元気が出るのだ。

今朝の献立は、炊きたての白米、若布とえのきの味噌汁、だし巻き卵、豆腐の肉巻き甘酢あんかけ、キュウリの浅漬けの5品。何品かはお弁当にも流用しているがそれくらいは許して欲しい。なにしろ毎日のことなので内容を考えるのも大変なのだ。主婦は偉大なのだ。

食べたら食器は直ぐ洗う。放置するほどに汚れはどんどん頑固になっていくのだから当然だ。うっかり一晩放置されたカレー鍋など目を覆いたくなる。

時刻は8時、朝のホームルームまであと30分。少し急げば充分間に合う時間。

「さて、と。それじゃ、行ってきます。」

イリヤ達は3年生に進級していた。そろそろ高校受験を本格的に視野に入れなければならぬ時期である。クラスにも徐々にピリピリとした緊張感が漂い始めていた。イリヤは家庭の事情も相まって最寄りの公立校へ、親友の響と未来は私立リディアン音楽院の高等科への進路を第一希望としている。

だがそれはそれとして、色恋沙汰に興味を示さずには居られない年頃でもある。女三人寄れば姦しいと諺がある通り、今日も放課後の帰り道で3人寄り集まって盛り上がっている。話の種は昼休みの時に男子から告白されたイリヤについて。

イリヤはモテる。文武両道で才色兼備。恐ろしいほどに整った顔立ちと紅玉の如き瞳に処女雪を思わせる髪、時折取る貴族然とした所

作と言動、エミヤ譲りの家事スキルと隠しきれない世話焼き気質。モテすぎる余りにモテない逆転現象まで起きているほどである。「雪の妖精」だの「白銀の姫君」だの「アルテミス様」だのいろんな渾名を頂戴していたりもする。もつとも、殆どの男子は直接アタックする度胸も無く遠巻きに眺めながら互いに牽制し合っている状態である。

しかしイリヤ自身はその事を余り自覚していなかった。精々が「この見た目の所為で何かと目立っている」程度の認識である。今までその手の経験など碌に無く、さして興味も湧かなかったのだ。

そもそもイリヤは男性の知り合いが少なく、その中でも好意に類する感情を抱いたのは父親である切嗣、義弟である士郎、自身が召喚したサーヴァントであるヘラクレス、アーチャーにして未来の士郎であるエミヤ、此方の世界の切嗣の5人くらいだ。この面子との比較に耐えうる男などそう居るはずも無い。

以上の事情から、イリヤは後腐れの無いように丁重にお断りさせてもらい、当たって砕けた男子は塵も残らず霧散した。

「で、断っちゃったんだ。相変わらずの鉄壁だねえ。」

「今まで良いなって思える人とか居なかったの？」

「うくん、殆ど居ないわね。」

「むー、もつたいないな。」

「イリヤちゃん、すごくモテるもんね。」

「私のことはいいの。それを言うなら二人はどうなのよ？二人とも実は結構ファンが多いらしいじゃない？」

「ええ〜！そんなことないよ〜！」

「そうだよー、未来はともかく私なんか全然だよ。」

数日後には忘れていそうな他愛の無い話、これもまたありふれた青春的一幕であろう。

「響と未来はこれから塾だっけ？二人が目指す私立リディアン音楽院高等科って偏差値高いから、響は特に頑張らないとね。」

私立リディアン音楽院は基本、小中高一貫教育を掲げているが中等科、高等科への切り替え時に外部の生徒を編入させることもある。まず各種音楽教科を中心に据え置き、そこに一般教科を組み込むという

独自のスタイルで有名だ。更にタレントコースが特設されて、ツヴァイウィングの二人が在籍している為、憧れて入学・編入する生徒があとを絶たないのだとか。

「あうう。でも頑張る！合格して入学出来れば、奏さんはもう卒業だけれど翼さんには会えるだろうし。」

「そうだね、あの時のことをちゃんと聞きたいし。」

「……そう。ま、そういう事なら尚更頑張って勉強しないとね。」  
イリヤは親友である二人に真実を打ち明けられないことに忸怩たる思いを抱きながらも表情には出さない。それに自分のことはともかく、あの二人の力やバックグラウンドについては本当に何も解っていないのだ。

（少なくとも天羽 奏と風鳴 翼の二人は利己的な悪意や邪な下心で動く人間には見えなかったし、響と未来は目撃者ではあっても此方側のことは何も知らない一般人。私が調べた限りライブから生還した後、不自然に失踪した人も居ない。リディアンが怪しいのは確かだけれど、危ないって程じゃないか。）

この世界において、魔術は彼方の世界と殆ど変わらぬカタチで信仰されている。つまり魔術基盤は大差なく、しかし若干の違いがある。彼方では世界で最も広く強固な魔術基盤を有しているのは、聖堂教会による神の教えであったが、此方ではノイズとなっている。なにしろ遙か昔から人類だけを殺し続けてきた災厄として誰もが恐れながら、詳細は一切不明と来ている。

神秘はより高位の神秘によって打ち消され、敗れた側は空想に堕ちるのが道理である。生半可な概念武装では通用しないだろうノイズの位相差障壁を問答無用で否定出来るだけのものなど極限られる。

一つめは固有結界。術者の心象風景で現実世界を塗りつぶし、異界を製造する大禁術『無限の剣製』  
アンリミテッドブレイドワークス  
ラスト・ファンタズム

二つめが神造兵装。最強の幻想と誉れ高い星の聖剣『約束された勝利の剣』  
エックスカバリ

だがイリヤは余程の状況でも無い限り使うつもりはない。それ以外にも相性の良い特性を持つ宝具は有る。因果逆転の呪詛を帯びた魔槍『刺し穿つ死棘の槍』空間ごと抉り穿つ『偽・螺旋剣』魔術的防御を無効化させる『破魔の紅薔薇』或いは魔音による衝撃波で広域破壊をもたらす『恐慌呼び起こせし魔笛』も有効かも知れない。

とは言え、この状況下ではどれも必要ないだろう。

山間部にある小規模な集落に顕現したノイズの一団、軍隊で言えば中隊を越える規模である。人間を狩る災厄の群。だがこの場においてノイズは蹂躪される側に立っていた。シンフォギアを纏った二人の少女によって。二人の連携はかなりの精度で、並のサーヴァントとなら戦えるだけの域に達していた。

「ちっ！結構飛べる奴の数が多いな。全く鬱陶しいったらない！」

「うん、大型は少ないけど飛行型が常に間合の外から隙を突こうとしてくる。気を抜けない。」

「あの高さじゃ私達の歌はギリギリ届いても攻撃が中々当たらねえ。」

その様子を遠く離れた位置にあるビルの屋上から視ていたイリヤは弓に矢をつがえる。鷹の瞳は直線距離にして約9 km先のノイズを鮮明に映している。

「ああもう!!こうなったらいつその事、絶唱でまとめて「ちよつと！ダメだってば!!」じゃあどうすんだよ!!」

だが二人の口論の決着が着く前に彼方から飛来する赤色の流星群によって飛行型ノイズは悉く薙ぎ払われた。

「!?こ、これってもしかして」

「・・・アーチャーの仕業かな。ったく、来るのが遅えつての。」

「さて、後は二人だけで充分でしょうし私はお暇させて貰おうかし

ら。」

イリヤは颯爽とその場から立ち去った。今は未だ接触すべき時ではない。時が来れば嫌でも顔を合わせることになるのだろうか。

## 受験生

前回のノイズ出現から僅か一月半、イリヤは再びノイズの一团と相対していた。巷では一般人がノイズに遭遇する確率は通り魔に襲われるのと同じくらい低いと言われている。イリヤの場合は、前回がツヴァイウイングへの助太刀で今回も自ら首を突っ込んだ訳だが。

平日の深夜、場所は都心の駅前。ここはイリヤの自宅から13 km程離れているが利用頻度は割と高い。普段ならこの時刻でも人通りはそこそこ多いがイリヤが察知して到着した頃には誰も居なくなっており、炭がそこいら中に積もっていた。

『これは、いろんな意味で最悪ね。』

彼等は運が悪かった。今は残っているノイズの処理が最優先だ。即座にそう割り切り思考を切り替える。今のイリヤは魔術師では無く魔術使いだが、それでも有事の際は一般的な常識や倫理観を棚上し、死を容認する程度の心構えは出来ている。

正直、目撃者の心配をしなくて良いのは好都合だ。既に人払いの結界を展開している以上、余程間の悪い奴で無い限りは巻き込まれることもないだろう。万が一居たとしたら、ソレはもう仕方ない。

監視カメラや偵察用のドローン対策に魔術で濃霧を発生(術者本人であるイリヤには普通に周りが見えている)させ、ヘルメットを消し去る。

「良い機会だし、角笛が効くかどうか試してみるところでしょうか。」  
『ラ・ブラッ<sup>ラッ</sup>ク・ル<sup>ク</sup>ナ『恐慌呼び起こせし魔笛』シャルルマーニュ十二勇士のアストルフオが妖鳥の大群を追い払うのに使用した魔笛。龍の咆哮や神馬の嘶きに例えられる程の音色である。

その角笛はイリヤの身体をスッポリと覆うほど大きく、金管楽器のような形状に変化する。

「雑音はそれらしく——散りなさい！」

Cランクとは言え対軍宝具である。まともに食らったノイズは跡形も無く霧散した。だがビルをも超える超大型サイズの個体が1体残ってしまった。位相差障壁は問題なく突破できたものの、殲滅しき

るには少しばかり威力不足だったようだ。

此までと今回の交戦でイリヤはある程度までならノイズを解析できていた。ノイズとは対人特化の自律兵器で、かつて英雄王ギルガメッシュの宝物庫に納められていたゴーレムの原典とも言える代物であるようだ。格としてはアヴィケブロンアヴィケブロンの鑄造したゴーレムと同等以上ではあるが宝具には分類されない。

まあ要するに、あのいけ好かない金ピカの管理不行き届きの所為で後の人間が迷惑を被っている訳だ。もう全部アイツが悪い。

「ふむ、そういう事ならアレとかも効くかもね。投影、開始。」

魔笛を消し去り、歪な刃の短剣を出現させる。それは魔力で強化された物体、契約によって繋がった関係、魔力によって生み出された生命を戻す最強の対魔術宝具。

イリヤは残る最後のノイズに迫る。ノイズは巨大な鋏の腕を大きく振りかぶるが、その動きは余りに鈍重で、結局腕が振り下ろされる前に破戒の刃は突き立てられた。

「破戒すべき全ての符」

擦り傷とも言えない一刺しでノイズは炭と崩れ落ちる。

イリヤが最初にノイズを感知してから今までで約40分。流石に武装した特異災害対策機動部が到着したので結界を解きライダーヘルメットをかぶる。

今回もまたツヴァイウィングと鉢合わせる前に、全力ダッシュで逃げ出したのだった。

中学3年生と言えば高校受験のシーズンである。大半の生徒は将来への展望など定まってはおらず、流されるように最寄りの公立校に行く。

イリヤもまた例に漏れず公立への進学を志望している。しかし教師等は渋い顔をしている。イリヤの学力ならばもつと上の学校を目指す以上、学校側としてはそちらに進学して欲しいと思うのは当然と言えば当然だろう。

元々イリヤはアインツベルン究極のホムンクルスとしてアハト翁ユーブスタクハイトによる（聖杯戦争のための偏った）英才教育を受けていたのと、エミヤから受け継いだ知識のおかげでどこの高校だろうと問題なく一発合格出来るであろう。

とは言え、現在の衛宮邸はイリヤの魔術工房でもあるため、他人には管理など任せられず迂闊に目を離せないと言う事情もある。身体の7割が魔術回路であり、尚且つデミ・サーヴァントのイリヤにとっては『鞘』があらうと定期的なメンテナンスは必須である。リズもセラももう居ないのだから。

そういった諸々の事柄をまさかバカ正直に明かすわけにもいかないうえ、教師に言及される度に曖昧な表情で沈黙している。

昼休みになり、何時ものメンバーで昼食をとる。今日のイリヤのお弁当のメニューは小さめの俵型のおにぎり（塩鮭×2、昆布×2）、砂糖で甘く仕上げた卵焼き、ポテトサラダ、唐揚げである。

唐揚げと一口に言っても様々ある。もも、むね、ささみ、手羽、かた、せせり、皮や軟骨等どんな部位を使うのか。片栗粉でサクサクもいしいし、小麦粉・卵でしつとりもいしい。スパイスを入れてフライドチキンだっていける。衣に味をつけたものも旨いし、肉に味を染み込ませたものも旨い。甘酢ダレでチキン南蛮にしたり、ネギソースで油淋鶏にしてもいいし、甘辛醤油にゴマや胡椒をふりかけるなんてのもありだ。一口サイズは無論のこと、大きいサイズにかぶりつくのも乙なものだ。

今日の唐揚げはシンプルに、ももを一口大にカットし、予めたれに漬け込み下拵えをしてから衣を薄くすることでサクサクカリカリに揚げたものである。

ちなみにイリヤは何もかけないか少量の塩コショウ派である。

「イリヤちゃんのからあげ美味しいよね。レンジでチンするやつはだいたい衣がべちゃべちゃになるけどコレは冷めてもサクサクカリカリだもん。」

「これ、しっかりと下味つけて二度揚げしてる？すごいなあ。揚げ物は少人数だと油が勿体ないんだよね。肉や魚は油がすぐ汚れちゃうし。」

「そういうときは焼き揚げがお勧めよ。少し深めのフライパンに2cmくらい油を入れて、あとは焼く要領で両面を揚げるの。使う油少なくてすむし、量を作らないならこれがお勧めね。」

「玉子焼きも白い部分がなくてふんわりしてる。」

「これは最初にかき混ぜるときに箸でしっかり白身を切るのがポイントよ。焼き加減は基本弱火、強くても中火ね。」

「正直、食べ専の私には何を言っているのかさえ良く解らない。」

「イリヤちゃんの料理って美味しいからつい食べちゃうんだよね。」

「もう、響ったら自分の分もあるでしょう？だめだよ。」

「あら、私は大丈夫よ。ちょうど成長期なのだし、受験勉強で頭を使う分余計にカロリーが必要でしょう。」

ちなみにイリヤの場合、成人男性の平均的な食事でも全然太らない。むしろ、平均的な女子と同じ量だとどんどん痩せていく。常時『鞘』を微稼働させ魔力を消費しているのと、日課の鍛錬、何よりデミ・サーヴァントなのが大きいだろう。

しかし身長だけは中々伸びない。此方の世界に来てもう4年、実年齢で言えば2X歳。体重：42kg、スリーサイズ：B83/W56/H82、でも身長は150cm。赤薔薇のローマ皇帝ネロ・クラウデウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクスと同じである。髪型を変えればまんま2Pカラーである。いや、やっぱり全然違った。

イリヤは食後のデザートにレアチーズタルトを取り出す。身長を伸ばすにはやはりカルシウムとタンパク質だろう。他にもアルギニン、ビタミンA、ビタミンCと必要な栄養素が多分に含まれている。炭水化物はおにぎり、マグネシウムもポテトサラダにたっぷり含まれているので抜かりはない。

身長のことか余程コンプレックスなのだろう。イリヤは響と未来が引くほどの勢いでレアチーズタルトをガツガツと喰べ始める。

(いつか必ずお母様を越えるスタイルになってやるんだからー!!)

そのお母様、アイリスフィールのプロポーションは、身長：158  
cm / 体重：52kg / スリーサイズ：B85 / W56 / H84であ  
る。いつか来たるその日まで頑張れイリヤ！負けるなイリヤ！

逸般人？いいえ、一般人です

夏休みに入ってイリヤは幾つかのアルバイトをしている。以前から勤めていたコペンハーゲンという酒屋兼居酒屋（とある虎教師曰く、毒婦集う女豹の巣）である。ちなみに、あくまで知り合いの手伝いをしてお小遣いを貰っている、という体裁なので労働基準法には触れないと店長は言い張っている。まあ、イリヤからすれば法律など今更ではあるが。

もう一つのアルバイトが、看板娘の蛍塚 音子さんの紹介で極道一門・藤村組の経営する「海の家」である。見目麗しいイリヤが水着でウエイトレスをするだけで大幅な集客率上昇間違いなしであろう。イリヤの着ている水着は、白のワンピースタイプで縁取りと胸元のリボンは赤、それに薄手の長袖パーカーである。陽に当たると肌がすぐあかくなつてヒリヒリしちゃうのだ。

「5番テーブルのお客様、イチゴかき氷2つ、ラーメン1つ、焼きそば1つ、お待たせいたしました！」

「2番テーブルのカレー3つとかき氷（レモン2、ブルーハワイ1）お待ち!!」

「は〜い!!」

「すいませ〜ん！ビール中瓶2つとコーラ1つお願いしま〜す！」  
「はい！少々お待ちを！」

イリヤはウエイトレスとして各テーブルと厨房を忙しなく行ったり来たりしている。勿論他にも店員は居るのだが、イリヤと臨時アルバイトで雇われた六導 玲霞さん以外は藤村組の厳ついお兄さんなので、彼等は基本厨房に回っている。もつとも、お客が調子に乗ってナンパやセクハラでもしようものなら即座にやって来てウラに連れて行く訳だが。

14時になり客足も落ち着きだったので二人に声が掛る。

「お二方とも、今日はもう上がって良いですよ。というより、売上げのノルマ達成どころか普段の3倍の繁盛振りで食材が切れかかっているんです。まあせっかく海に来たんだし楽しんできてください。」

二人はそれぞれ水着に着替えて浜辺を散歩しながらおしゃべりをする。ちなみに、玲霞の水着はスカサハの色違いである。玲霞はイリヤから見てもとびきりの美人でスタイルも抜群、更に愁いを帯びた表情で儂げな雰囲気醸し出していた。もつとも、その瞳には時折空虚な闇が垣間見えるが。

話によれば玲霞は裕福な家庭で教養豊かな育ちだったが、両親は二人共に半年前に不幸に遭い天涯孤独な身になったのだそうだ。玲霞自身もその事故に巻き込まれていて死にそうになっていたところに、偶々通りかかったイリヤに助けられたのだ。だがその時の傷心と、自分だけが生き残ったという罪悪感のようなものから、ふさぎ込んでいたところにお節介な虎教師がこのアルバイトを紹介したのだとか。当人達には与り知らぬ事ではあるが、このお節介が無ければ玲霞は絵に描いたような転落人生を歩んでいただろう。無自覚に周囲の人間の不幸を打ち消す辺り、この世界でも彼女の幸運はEXらしい。

それはともかく

玲霞とイリヤが揃って水着で浜辺を歩いているのである。当然の如くナンパされる。しかし

「Was seid ihr? Wirst du mich schlagen?」

(何、貴方達?ナンパ?)

「Gib mir einen Moment, Miss Ill ya」

(お手柔らかにね、イリヤちゃん。)

「Das liegt an dir. Ehrlich gesagt mag ich nicht leichtfertig Manner」

(ソレは相手次第ね。私、チャライ男は嫌いなの。)

「Ich stimme zu」

(まあ、それは私もだけど。)

ナンパしてきた男共は

「うわっ！やっぱ外人じゃねえか。」

「つか今の何語？マジでイミフ。」

「ああ、ヤベーな。ナニ言ってるのかさっぱり解んねえ。」

等と言いながらも肩に手を回そうとしてくる。実に無礼な輩である。

「ま、何でもいいや。オレ達が楽しめりやな。」

「だな」

男達は下卑た笑みを浮かべながらイリヤと玲霞を取り囲む。

「——Willst du kasteriert sein, Hund?」

(・・・去勢されたいのかしら、駄犬共)

されどイリヤは半ば英霊と化した存在。チンピラ風情、100人束になったところで負ける道理は無い。衆人環視の直中で不埒な真似をしでかす愚かな輩を成敗する。

『一夫多妻去勢拳』

からの

『呪相・玉天崩』

そして、とどめの

『常夏日光・日除傘寵愛一神』

クリーンヒット。それぞれに9999のダメージ。死んだ。

「Es ist eine schreckliche vorze  
itige Ejakulation?」

「あら、まあ。なんて無惨。ヽ(愁傷様。)」

夜になり、夕飯の折に藤村組の若衆にとある注意事項を聞かされる。

「実はこの海水浴場ですがね、あっちの山の方には曰く付きの廃洋館があったりするんです。勿論普段は立ち入り禁止になっていますが、肝試しに無断侵入する若者達も相当数居ましてね。危ないんで決し

て行ったりしないてくださいね。」

イリヤからすれば無名の亡霊などは大したものではない。その程度ならば、万一こちらに飛び火してきても充分祓えるレベルである。というか、魔術回路を励起させるだけではじき飛ばせる。それこそ柳洞寺のサムライのような例外でも居ない限りは。

「その廃洋館には何かしらの曰くがあったりするのでしょうか？」

「はい。何でも、とある旧家の華族だかが住んでたらしいんですがね？ どうもその一族には、下々の者には理解しがたい風習があったみたいなんです。噂では地下に牢獄があつて、壁には爪の痕や血で書かれた文字がびっしりとあるとか。」

「あら、まあ。それは怖いですね。」

「ええ。おまけに、肝試しに行つてそのまま帰つてこない奴まで出る始末でして。そんな訳でその廃洋館には絶対に行かないで下さいね。お二人の身に万一何かあろうものなら大河お嬢に顔向け出来ない。」

「はい、分かりました。」

「ええ、了解よ。」

その話を聞いて、イリヤはマキリを思い出した。彼もかつては理想を掲げていたが、自身の延命のために幾度も外法を重ねた結果、掲げた理想は魂諸共に腐敗し、吸血蟲の魔物の如く存在になり果てていた。余談ではあるが、シナリオ担当は彼のことが大好きで、登場するとタイピングのノリが変わるのだとか。

イリヤの連想は決して、何の脈絡もないただの追憶では無かった。その廃洋館には、実際に魔物が存在していたのである。

『空柩』の字を持ちながらも人間の料理レリに執着し、本能に抗いながら料理を作り続ける死徒が。一説では、かつてはコイツのせいTYPE-MOONで本気で世界の理が崩れそうになったのだとか。

## フアツシヨン

10月上旬、夏ももう終わりを迎え、すっかり秋となった。早朝は長袖でも一枚では肌寒さを感じる時期である。

生徒達は定期試験の結果に一喜一憂し、間近に控えた高校受験に一層勤しむ。仲の良いグループで勉強会を行う者達も多く、イリヤもその例外には漏れなかった。

「ベンティアドシヨットヘーゼルナッツバナラアーモンドキャラメルエキストラホイップキャラメルソースモカソースランバチップチョコレートクリームフラッツペチーノ下さい。あと、バターミルクビスケット2つ。」

「響、それ全部でカロリーおいくら？あ、私はキャラメルフラペチーノトールエクストラソースエクストラホイップと、アップルパイとオールバターシヨートブレッドをお願いします。」

「いや、未来も私のことあんま言えないし。玲霞さんとイリヤちゃんとは？」

「そうねえ、私はグランデノンファットミルクノンホイップチョコチップバナクリームフラペチーノにしようかしら。それと、デニツシユステイックチョコレート一つにアメリカンスコーンの抹茶を一つ。」

「なら私はスオーバックスラテのアイスと、アメリカンワッフルのプレーンとシナモンロールにするわ。」

「かしこまりました。お時間、少々頂きます。席でお待ち下さい。」

今日の勉強会は某コーヒーショップで行うことになったのだ。軽食もオーダーしているのは昼食も兼ねているからである。玲霞も一緒にするのは、響と未来が受験を受ける私立リディアン音楽院の高等科に在籍している事もある家庭教師をして貰うからである。

流石に玲霞は経験者だけあって教えるのが巧い。イリヤでは、通常の科目ならまだしも音楽的な専門知識には欠けるため、こう巧くは教

えられない。おかげで勉強会はつつがなく進行し、1時間ちよつとで一段落ついた。

「はふく、すいませーん。キャラメルマキアート下さい。」

「私も同じもので。えっと、二人は何かお代わりする?」

「私は抹茶クリームフラペチーノで。」

「私はカフェモカにしてみようかしら。」

一息ついて今日はもう解散しようかというところで、イリヤはつい「んく、そろそろ冬モデルの服を買わないといけないかしら。」

と漏らしてしまった。

イリヤは衣類に関してある種、無頓着と周りから思われる節があった。普通の女子に比べて持っている服の数が少ないのがそう思われる理由だ。だが実際は、大貴族たるアインツベルンの姫君としての美意識は相応に持ち合わせていて、中身の伴わない見てくれだけの派手な装飾や昨今の流行にはあまり興味が無いのだ。半エミヤ化した今のイリヤにとっては、服を沢山よりも上等な調理器具の方が欲しいくらいである。

されどそれを許さぬ者がここに三人居る。イリヤは近くにあった大型のアパレルショップに強制連行され、着せ替え人形の如しである。

響の選んだ服はカジュアル系で、紺のジーンズと黒のタートルネックにトレンチコート。

未来の選んだ服はファンシー系で、縦セーターとセミロングスカートに白いケープフアーコート。

玲霞は意外にも、白のブラウスに藍色のハイウエストスカートに黒のニーソックスであった。セイバーの私服とほとんど同じ筈だが、何故かイリヤの方がより対女性経験に乏しい男兵装に仕上がってしまった。

他にもいろいろな服を持ってこられた(その中にはどこかで見たよ

うなブルマが混じっていた)が、最終的にはその3セットを購入した。イリヤとて着飾るのが嫌いという訳ではないし、何より彼女たちの好意を無碍にはしたくなかったのだ。

その後、玲霞が派手に彩られたエリアを見てふと呟いた。

「そう言えば今月はハロウィンがあつたわね。皆は何か仮装パーティーとかしたりしないのかしら?」

「ああ、いいかも。ねえ、皆で何かやろうよ。」

それに響が食いついた事であれよあれよと話が進み、いつの間にかコペンハーゲンでささやかながらも仮装パーティーをすることになったのだった。

ハロウィンとは日本の盆踊りのようなもので、古代ケルトのドルイド達の間では10月31日が1年の終わりと見なされていた。終わりが過ぎ去り、新たな始まりがやって来る日である。それ故に、現世と霊界との間に目に見えない「門」が開き、この両方の世界の間で自由に行き来が可能となると信じられていた。

まあ、それもすつかり形骸化して、今やコスプレパーティーの日と思われているが。

そして迎えたハロウィン当日。コペンハーゲンの店内には様々なジャック・オー・ランタンが飾り付けられている。

響の仮装は、魔法少女である。橙色を基調としたフリフリドレスに、紅い取っ手でヘッド部分は金の五芒星をリングが囲い白い鳥の羽があしらわれたステッキを握っていた。

未来の仮装もまた魔法少女だが、此方は蒼色がベースで、ヘッド部分は六芒星でリングの外側に蝶の羽のような意匠が施されていた。あと、響のと比べて露出が際どい事になっていた。

イリヤの仮装は姫騎士と言ったところか。髪は聖骸布のリボンでポニーテールに、白のドレスに白銀の甲冑を纏いカリバーン装飾剣を携えてい

る。

玲霞の仮装は、黒いボディコンみたいな衣装でバイザーを装着している。実は他の<sup>ジャック・ザ・リッパー</sup>の衣装で来るつもりだったらしいが、流石にエロすぎると言う理由でボツになった。

看板娘のネコさんは、黒い和装に猫耳と典型的な猫又ルック。

藤村 大河は、ジャガーの着ぐるみである。

「いや、今日はありがとねオトコ。」

「二」「有り難うございます、ネコさん。」「三」

「良いって事よ。それより藤村、ちゃんとネコって呼びなさいよ！」

「あはは、ごめんごめん。これ上げるから許してよ。」

そう言っって持っってきた中位の段ボール箱3つを指差した。

「あの、ずっと気にはなっってたんですがこの箱の中身、何なんですか？」

「むっふっふ、よくぞ聞いてくれました玲霞ちゃん。ではご開帳！  
ジャジャーン!!」

中には蜜柑と梨と林檎がぎっしり詰まっていた。

「そーいやアンタの実家、シーズン毎に青果市場かと思うくらいにいろんな果物貰うもんねえ。」

「そうそう、もうどどどーん！てくらい。で、この秋の風情をお裾分けしてあげたーい！っていう暖かい私からの配慮なワケよ。」

タイガはえっへん！と胸を張る。

「ありがたいんだけど、こんな沢山食べきれるかなあ。」

「多分、大丈夫なんじゃないでしょうか。ケーキやパイにしたり、それでも使いきれない様ならドライフルーツにしたり、お酒に漬け込むなんて言うのもアリだし。」

イリヤが手に取っって見た限りはどれも上等の代物である。

「おお、成る程ねー。じゃあイリヤちゃんに任せた。あ、酒漬けにするならラム酒やブランデーなんかで甘く仕上げたのも良いけど、アタシとしては氷砂糖無しで焼酎とかスピリッツで仕上げたほうが好みかなあなんて。」

「・・・良いんですけど、その場合は店のお酒を使ってしまったても良いんですか?」

「んん。特別に許しましょう!」

「了解。覚えておきます。」

ちようどそこでオーブンがチン!となる。どうやらモノが焼き上がった様だ。

「おおー、良い匂いだ。これ、パウンドケーキか?」

「パウンドケーキよ。本場アイルランドではハロウインの定番料理なの。あつちじゃ中に指輪やコインなんかを入れて、パーティーの最後に運勢占いをするんですって。これはちよつとシナモンを効かせたラムレーズン入りのパウンドケーキで、その手の仕込みはないんだけどね。」

それから、せっかくなので林檎を使わせて貰うことにする。

「お、早速使っちゃおう?」

「ええ、作るのは焼きリング。フライパンでパツと簡単にできるやり方があるからね。」

「私も何かお手伝いしましょうか?」

「ありがと、玲霞さん。じゃあ、リングを12等分にしてヘタと種を取り除いて貰えるかしら。あ、リングは皮付きで使うから。」

その間にイリヤは他の材料を揃え、フライパンを中火で熱してバターを溶かす。

リングをフライパンに敷き詰め、グラニュー糖大きじーをまぶす。表面に焼き色がついたらひっくり返して、再びグラニュー糖大きじーを振りかける。次に、弱火にして蓋をし、5分程度蒸し焼きに。リングからしみ出した煮汁をカラメル状になるまで煮詰める。最後に、シナモンパウダーを振りかけるとなお良し。

玲霞も冷蔵庫に仕舞っておいたモノを取り出し、切り分けている。「こっちのパンプキンクリームタルトもありますからね。沢山食べて下さいね。」

「「「おおー!」」」

# Unlimited Blade Works

ハロウィンパーティーは大いに盛り上がった。帰り道も3人で楽しく並んで歩く。ハロウィン当日だけあって周りには仮装している人も思っていたよりも沢山居たが、3人の格好はやはり周囲の目を惹いた。本人達が相当な美少女なのもあるが、特にイリヤの甲冑と装飾剣は非常にリアルなのだ。

「でも考えてみたら、ちよつとパーティーのバランス悪かったかしら？」

「ああ、私と未来が後衛の魔術師で前衛は剣士のイリヤちゃん1人だもんね。」

「確かに攻撃に偏ってるね。私、ヒーラーとかだったら良かったかな？」

まあ実際は、イリヤは1人で攻撃（全距離対応可能）、サポート、治療と一通りできるオールラウンダーなのだが。RPGで言えば勇者タイプだ。と言うかマジでチート。

そんな話を話しながら歩いていると

「すいませ〜ん。良ければ写真撮らせて貰っても良いですか〜？」

と声をかけられた。目を向けると、一人のコスプレイヤーがスマホを手に近付いてくる。少し離れたところには、数人の仮装したグループが盛り上がっていた。恐らく取り合った写真をインスタグラムに上げてその評価に一喜一憂しているのだろう。

仮装は、ド定番のジャックオーランタン、妙に胡散臭さい笑顔の神父、小竜公ヴラド3世（吸血鬼ではない。ないのだ！）、魔法少女マジカル☆ブシドー ムサシ。そして声をかけてきた女の子は、ボディアーマーは胸部まででお腹は丸出し、下も黒いレザーのホットパンツで生足にベルトを巻いている。そして、象徴的な紅い外套に漆黒の大弓。その格好は自分のものだった。

（うっ！端から見るとやっぱり恥ずかしいなあ、この格好。せめてズボンくらいは履くべきかしら？）

街が黄昏に差し掛かり、濃影と緋光のコントラストに彩られる。陽は地平に沈み、月が宙に昇り往く。昼と夜が入れ替わる瞬間、逢魔時である。

黄泉の黄金郷より這い出し魍魎魍魎と、闇を恐れる人が出逢うにはこの上無い刻。『蔵』より顕現せしその群は瞬く間に増大し、雲霞の如く空を覆う。

気が付いたときにはもう手遅れで、雑踏の人影は次々に虚影の塵と為りて逝く。彼等は空から降り注ぐ死の豪雨より逃れる術を持たぬが故に。

街は突如として阿鼻叫喚に包まれ、掛け値無しに地獄と為った。もはや逃げ場など何処にも在りはしなかった。

アレこそは人間に終末をもたらす死の軍勢であり、際限なく自己増殖する人類を殺す災禍。最古の特異点において、統一言語を失い相互理解を放棄した先人達の創り上げた負の遺産である。

人間程度が絶望の大波に抗える道理など有るはずも無い。今宵、この街は死都と化す。それが当然の結果。

だが、ここに例外が存在する。

特異災害対策機動部二課にて、シンフォギア装者である天羽 奏と風鳴 翼が駆けつける。

「弦十郎の旦那!!」

「状況を教えて下さい!」

「現在、反応を絞り込み位置の特定を最優先としています。」

この時点でノイズが現れてから10分が経過している。既に多くの人間がノイズの犠牲となり、その数は増え続けている。無論、オペレータの皆は全力で頑張っているのは理解している。それでも二人の少女は、防人で在りながらただ待っているしか出来ない現状に苛立ち、モニターを見ながら歯噛みする。

「反応、絞り込みました！位置、特定！」

「ノイズとは異なる、高出力エネルギーを検知！」

「は、波形を照合！急いで!？」

モニターには『Archer』と表示される。

「しかも、桁違いの量のフォニックゲインを計測！」

「映像、出ます！」

偵察用のドローンのカメラに写る3人の少女。そのうちの二人は魔法少女の仮装をしていた。そしてもう一人、恐ろしいほどに整った顔立ちと紅玉の如き瞳に処女雪を思わせる髪の少女。あの紅い外套は間違いなくアーチャーのものである。何より彼女から発せられる破格のフォニックゲインが、一般人のコスプレなどでは断じてないのだと証明している。

「どうやら、彼女がアーチャーと見て間違いなさそうね。」

しかし、その様は窮地と言って差し支えのない状況であった。何しろ100を越えるノイズの大軍勢に完全包囲されているのだ。それは端から見ても絶望的である。いや、これがアーチャー一人だけであったのならこの包囲網を突破できるだろう。しかし今は二人の少女を庇いながらである。

「ヤベえぞ、コイツは!!」

アーチャーに庇われている二人は、まず無事では済むまい。最悪の場合、3人全員がノイズに貫かれ絶命に到りうる。だが、もはや自分達が駆け出したところで到底間に合いはしない。ここから現場までどんなに急いでも20分は掛る。

しかし、それでも天羽 奏はただモニターを見ているだけだなんて

我慢できなかつた。それじゃあ5年前の、ただ一人だけ生き残った無力だった頃の自分と何も変わらない。この絶望を超克する為にシンフォギア装者となったのだ。

「チクショウ！何か手は無いのかよ!？」

じつとして居られないのは風鳴 翼も同様だった。彼女もまた人類守護の防人を自負する者。戦士としては身心共に未熟ではあるが、だからこそ綺麗に割り切れる程に達観出来ていない。若き故の無鉄砲とも言えるだろう。

「司令官!」

風鳴 弦十郎とて見捨てる事など到底出来はしない。立場から来る理論や理屈よりも、信念や直感を重視する熱血漢である。人としては善良だが、責任者にあるまじき直情径行ではあるが。

「ああ、現場に急行する!何としてでも、彼女達を助けるんだ!!」  
だが、実際に彼等が動き出すよりも前に、彼方の状況が大きく動いた。

『——そう、なら見せてあげる。』

そして彼女は謳い上げる。

『体は剣で出来ている』

『これは、彼女の聖詠なのか?』

『血潮は鉄で、心は硝子』

『フォニックゲイン、尚も上昇中!』

『幾たびの戦場を越えて不敗』

その詩は、風鳴 翼の総身を振るわせた。

『ただ一度の敗走もなく』

その詩は、天羽 奏の血潮を熱く滾らせた。

『ただ一度の勝利もなし』

それに異端技術ブラックアートの第一人者である櫻井 了子は気が付いた。アーチャーを中心に空間そのものが侵食され始めたのだと。

『遺子はただ独り、剣の雪原で黄昏を待つ』

「うそ、まさか位相の異なる世界を自ら展開していると言うの!?!」

『我が生涯の意義は既に果たし』

ドローンのカメラを通じて僅かに垣間見えるその世界は、晴れ渡る蒼穹と無数の刀剣類が乱立している純白の雪原。

『この体は、今や剣で出来ていた』

そして個人の心象と現実の世界は切り替わり、ドローンからの映像も完全に途切れた。

現実に残されたのは、灰燼に塗れた無人の街。そこにノイズはただ一体も居残ってはなかった。

その余りにも予想外な展開に暫くの間、二課の誰もが啞然としていたのだった。

## 剣の雪原

突如として街はノイズの大軍勢に飲み込まれた。一切の淀みなく、統率された軍勢の様に。あるいは、蜜に群がる蟻の群の様に。

『悲報が訪れる時』は、  
When sorrows come, they come not single spies,  
But in battalions.  
軍団で押し寄せてくる』シエクスピアの小説「ハムレット」の一節にこの様な台詞回しがあるが、実にその通りだと思う。

イリヤは諦観の表情を浮かべながらも即座に剣を抜き迎撃する。しかし哀しいかな担い手としての資格を有していないイリヤでは『勝利すべき黄金の剣』の真価を発揮する事が出来ない。しかし、所有者の魔力を熱量に変換し増幅、光の粒子として放つという特性は辛うじて発揮できる。剣に大量の魔力を叩き込みながら振りかぶる。

「極大斬撃!!」

だが、それで撃破出来たのは攻撃態勢に入っていたノイズのみ。多くのノイズは斬撃をすり抜けていた。解っていた事ではあるが、思わず舌打ちする。

イリヤは赤原礼装に換装し、響と未来に振り返る。

「二人とも、今までで黙っていてごめんなさい。隠してた事については後でいっぱい怒られるし、全部説明する。だから、絶対に生きる事を諦めないで!!」

「う、うん。わかった!」

「私も、へいき、へっちゃら。」

二人は今にも泣き出しそうな、まるで断罪を待つ咎人のようなイリヤの表情を見てそれ以上の事は何も言えなくなってしまった。

イリヤは『コウトリの騎士』を3羽形成して背後の二人を警護させる。大型ノイズの攻撃には耐えきれないだろうが、小型の死角からの急襲ならば多少は持ち堪えるだろう。

だが、街の人達全てを守り切る事など不可能である。庇いきれない範囲にいる人たちは必死に逃げ惑うも、炭に為って逝く。

その上、ノイズはイリヤをこそ最大の障害と見なした様に群がって



際の悲鳴に貶められぬよう。

そして――

今更ではあるが

この大波が通常の塵芥の集合であったのならソートバレルフルオーブ全投影連続層写や対軍宝具を以て薙ぎ払う事も容易であったろう。しかしノイズには位相差障壁があり、最優の対抗手段であるシンフォギアは今この場には存在しない。である以上、守るべき二人の存在が甚大な枷となる。

個体としては煩い雑音でしか無いが、其れはあくまでもイリヤを基準にした場合での話。か弱い少女でしかない響と未来にとつては絶望的な脅威である。

そして、自衛が凡そ不可能な仲間を背後に庇いながら戦うしかないこの状況下においては、数的な不利というのは余りにも大なるハンデと為る。

例えば、襲いかかるノイズの大軍勢の内の幾らかを阻止ないし撃破出来たとしても、其れではダメなのだ。僅かでも撃ち漏らしたのなら背後の二人に致命打を与え得るのだから。

そして、今の彼女達は全方位をくまなく包囲されている。聖剣も螺旋剣も魔笛も強大な威力を誇るが、その破壊力は指向性である。四方八方からの同時襲撃には対処しきれない。

で、あるならば。――残る手段はただ一つ。

「――そう、なら見せてあげる。ああ、貴方達が地獄を謳うというのなら」

そしてイリヤは謳い上げる。彼から受け継いだ世界を。

「体は剣で出来ている」

それは、彼が抱いた理想の果て。一つの到達点。

「血潮は鉄で、心は硝子」

誰も傷つかない世界。彼はそんなモノは理想に過ぎないと知った

上で、それでもなお求め続けた。

「幾たびの戦場を越えて不敗」

その人生の結晶を、イリヤは受け継いだ。

「ただ一度の敗走もなく」

自身の心象を以て現実そのものを塗りつづす魔道の最奥

「ただ一度の勝利もなし」

錬鉄の固有結界『無限の剣製』アンリミテッドブレイドワークス

「遺子はただ独り、剣の雪原で黄昏を待つ」

イリヤを基点に世界が塗り替えられていく。

「我が生涯の意義は既に果たし」

晴れ渡る蒼穹と無数の刀剣類が乱立している純白の雪原。

「この体は、今や剣で出来ていた」

世界の在り方が完全に塗り替わり、それによつてイリヤ達を全方位から完全包囲していたはずのノイズはまとめて彼方に移行していた。中央に立つイリヤ、その後ろに響と未来の二人は退避している構図となっていた。

人間にとつて今回の大軍勢が全てを無明に飲み込む泡沫の波濤タイダルウェイブであるならば、ノイズにとつてこの剣の雪原は遍く存在を凍てつかせる永久コキユートスの地獄。

そもそもノイズ如きがイリヤ相手にまがりなりにも優勢に立てたのは、圧倒的な数の有利と位相差障壁の二つが揃っていたからこそである。だが、そのアドバンテージは失われた。

この期に及んでノイズに残された手段はただ一つ。否、元よりそれ以外の手段など持ち合わせてはいないのだ。

例え壊滅以外の結末が有り得ないと解つていても、それでもノイズは創レソッセンり出された意義デイトルを果たさんとする。

「ご覧の通り、貴方達が挑むのは無限の剣。剣戟の極地！恐れずしてかかつてきなさい！」

そう言いながらイリヤは、捻れた翼のような装飾が施された宝具を地に突き立てる。

「そらはちよりちはそらへ地臥す夜鷹の千年溪谷」

これはある世界線において、地の獄より溢れ出た英霊亡の残骸達霊の一人が使用していたモノ。

大地を爆発的に隆起させ、圧倒的な大質量で押し潰す。

地を這いずり回るしか出来ない雑音に為す術など無く、その大半は飲まれて掻き消える。

しかし、多くのノイズが五月蠅く飛び回っている。その数は、200を超える。更に、地上の残響が凡そ1000体。

数で言えばそこそこだが、大型サイズ以上の個体は一体も残っていない。ならば大軍宝具を後一度振るえば片が付く。魔笛による大音響でも辛うじて消し去る事が出来るだろう。

だが、ノイズには合体、融合することが可能という特性がある。個々としては脆弱であると言うならば、300全てを一つに束ねた場合はどうか？

それは今まで確認されてきた超大型を圧倒するほどに大きく、不特定多数の頭部を有し、その頭部はまるで龍の様であった。その上、後ろに居る響と未来の二人に対して、小型ノイズという毒を吐き散らかそうとしている。

「・・・本当に、つくづく不愉快な雑音ね。いいわ、雑音如きには過ぎた御業だけど、是れで消してあげる。」

イリヤはノイズを殲滅する為に、とある宝具を手元に手繰り寄せる。それは巖の守護者が生前に使用した弩。彼は是でヒュドラの100頭同時殲滅を成し、後に自身の絶技へと昇華させた。

「―――投影、装填」

マスターはパスを通じてサーヴァントの過去を夢という形で垣間見る。そしてイリヤとバーサーカーは2ヶ月もの間共に在り続けた。故に、ヒュドラ殺しの場面も当然の如く夢で見ている。

（今、私が挑むべきは自分自身。ただ一つの狂いも妥協もなく、寸分違

わずトレースする。」

「我は令呪を以て己に命じる。」

イリヤスフィールとして現状持ち得る全ての特権を惜しみなく動員し、今ここに神話の偉業を再現する。

ナインライフズ・オーバーロード  
「真・射殺す百頭」

## 特異災害対策機動部二課

特異災害対策機動部の一課が現場に到着したのは、ノイズ発生から15分後の事であった。二課からの報告ではアーチャーと名乗る少女が残存するノイズ約1000体全てを結界に引きずり込んだらしい。俄には信じがたいが実際に街にはノイズは1体も確認されなかった。

街の住人の多くが負傷している為、一課の職員達は先ず重傷者の救急搬送を行い、比較的軽傷な者に治療を施す事にした。流石に良く訓練を積んでいるだけあって、仮設の治療施設を拵えるまで5分と掛っていない。すぐ近くにシエルターがあり、手持ちにない物資もその備蓄を拝借する事で補えたのが大きいだろう。

二課の面々が到着した頃には、人でごった返しあちこちで怒号や悲鳴が飛び交う修羅場と化していた。場が沈静化し、職員達が一息付ける様になるまでに数時間を要した。

そして、そこから幾何か離れた場所に3人の少女が沈痛な面持ちで蹲っている。橙と蒼の魔法少女と白銀の姫騎士である。格好こそ変わっているが、あの少女こそ『Archer』に相違ない。

二課の職員達は一課と共に民間人の対応に当たると共に、件の少女達へ細心の注意を払い続ける。この機会を決して逃がさない様に。

二課の女性職員が3人に飲物を手渡しに行く。その際にシンフォギア装者であるツヴァイウィングの目配せをし、二人もそれに確りと頷く。

「あの、あったかいもの、どうですか？」

「・・・ありがとうございます、いただきます」

「二課の・・・ありがとうございます。」

「・・・む！・・・美味いわ」

「・・・ほう。本当だ。」

「・・・うん、あったまる」

騎士の少女は立ち上がり死者を弔う詩を口ずさむ。未練を残さず

迷う事無く往ける様に。

「主の恵みは深く、慈しみは永久に絶えず。あなたは人なき荒野に住まい、生きるべき場所に至る道も知らず。 餓え、渇き、魂は衰えていく。 彼の名を口にし、救われよ。 生きるべき場所へと導く者の名を。 渇いた魂を満ち足らし、餓えた魂を良き物で満たす。 深い闇の中、苦しみと鉄に縛られし者に救いあれ。 今、枷を壊し、深い闇から救い出される。 罪に汚れた行いを病み、不義を悩む者には救いあれ。 正しき者には喜びの歌を、不義の者には沈黙を。 ——  
去りゆく魂に安らぎあれ」  
パクス・エクス・ウンティウス

その洗礼詠唱は囁き程度の音量であったが、清んだ鈴の音を思わせる聖歌のようであり、同時に未だ受け入れる事が出来ない人々に現実を突きつける厳かな鉄槌のようでもあった。

「これでノイズの犠牲になった人たちも、……ちゃんと往けたのかな？」

「そうだと、良いね……」

「さて、どうかしら？」

現実を生きていく以上はどんなに辛くても悲しくても背負っていかねばならないのだ。過去とは継り付くものではなく、未来に進むための礎であるべきだろう。とある怨天大聖の言葉を借りるなら、その苦悩は誰も理解してやる事は出来ない。人間に支え合う事ができるのは荷物じゃなく、荷物の重さで倒れそうな体だけなのだから。それでも世界は続いている。瀕死寸前であろうが断末魔にのたうちまわろうが、今もこうして生きている。であるのなら、未だ充分なせる事があらずだ。其れが何であろうと構わない。全ての生命は、後に続く者達に認めて貰うために現在を走り続けるのだから。

現場の悲壮感が幾分和らいだところに装者の二人に対して司令部に待機している弦十郎より通信が入る。

『奏、翼。件の少女達についてだが、調べがついている範囲までだが説明しておく。どうやら地元の公立中学校に通っているらしい。3人とも三年生だ。名前は橙色の魔法少女が立花 響君、蒼色の魔法少女

が小日向 未来君。そしてアーチャーと思われる騎士の少女が衛宮  
イリヤスフィール君だ。前者二人に関しては、恐らく本当に一般人  
なのだろう。これと言う様な目立つ経歴も見られなかった。だが』

「アーチャーの奴には、何か特別な経歴とかでもあったってことか？」  
『ああ、彼女は数年前に赤十字のスタッフだった衛宮 切嗣に拾われ  
て養子になった様だ。しかしその切嗣氏も凡そ2年前に他界してい  
る。今は残された武家屋敷で独り暮らしらしい。学業においては全  
国模試で1位になった事もあり、体育の成績もトップクラス、家庭科  
においてはプロ並みとのことだ。ただ、それ以前の事については全く  
判らない。いっそ不自然なほどにあらゆる痕跡が見付から無いん  
だ。』

「ふうむ。・・・それは、また」

『だが特異災害対策機動部としては、彼女とは可能な限り友好的な関  
係を築きたい。それに前回のライブと今回の件で、日本政府の上層部  
はもとより、各国政府も彼女の存在に注目するはずだ。外交のカード  
に利用される程度なら未だマシ。このまま放置すれば最悪の場合、強  
制的に拉致されて非人道的な実験の対象にされる可能性すら考えら  
れる。』

「つたく、これだから政治ってのは、難儀なモンだな。」

『まったく。手間をかけさせてしまい済まないが、頼んだぞ。』

「あいよ。」

「了解しました。」

「衛宮 イリヤスフィールさん、お疲れのところでも申し訳ありません  
が、貴方をこのまま帰す訳には行きません。特異災害対策機動部二課  
まで同行していただきます。」

想像以上にド直球だった。駆け引きも交渉もあったもんじゃ無い。  
実直で融通の利かない不器用な性格なのだろう。

イリヤにとってその要求は既に予想できていたし、無理をしてまで  
断る理由も無いため、大人しく連行されていくつもりであった。だが

「待つて下さい。あの・・・わたし達も一緒に「ダメよ、未来。響も」  
「イリヤちゃん、いくら私でもこのまま日常に帰って普通に過ごさせる  
ほど脳天気じゃ無いよ。」

二人は固有結界の中で聖杯戦争イリヤのルーツについての平凡の事情を聞いていた。

かつて、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンは大聖杯によって穿たれた孔を閉ざした。結果としてあの世界線の大聖杯は消滅し、孔を閉じる事には成功した。しかし、その際にイリヤは「への開通が為されてしまっているのだ。つまり、膨大な魔力さえあれば閉じた門を再び開き『天ヘウンス・フィールの杯』に到る事も決して不可能では無いのである。もつとも、その事を特異災害対策機動部二課や櫻井フイー子ネが知るのはもつと後の話だが。其れはともかく

「もう嫌なの。何も知らないまま、ただ守られるだけだなんて・・・」  
「一つ言っておくわ。自分の意思で戦うのなら、その罪を罰も自分が生み出したモノ。背負う事すら理想の内よ。でもそれが罪悪感からの強迫観念故のモノであるのなら、理想を抱いて溺死することになるでしょう。理想のために戦って救う事が出来るのは理想だけなのだから。その果てにちゃんと自分自身をも救うという望みが無い限りはね。」

イリヤは敢てその先を言葉にせず視線だけで二人に問いかける。貴女達が放棄しようとしている日常は、一つのきっかけで容易く崩れ去る程度には儂くて、だからこそ眩しいくらいに尊いモノなのだど。

「  
」  
だが二人は真つ直ぐにこちらを見据え続ける。この二人の性質上、一度こうなったら恐ろしく頑固だ。もう梃子でも折れないだろう。

「・・・この先は地獄よ？」  
「それでも私は進むよ。例え偽善であったとしても、助けられるのなら苦しむ人たち全てを救いたいっていう願いは決して間違いないんじゃないや無いと思うから。」

未来も同意見なようで、確りと頷いている。

「どうやら話は纏ったみたいだな。んじやま、歓迎するぜ。行こうか、

「特異災害対策機動部二課の本部にな。」



ように細心の注意を払わねばならない。

「これから一気に下まで行くので、何かに掴まって下さい。フリーフォール程ではありませんが、結構勢いがありますから。」

「ええ？ええ？……って、うわああああああああ!!!?」

二人は、絶叫を上げながら手近なモノにしがみつく。唯一の男性である緒川 慎次に。それはもうガツチリと。

ふと、イリヤと、眼が、合う

「……………」

「……………」

後に緒川 慎次はこの時の事を震えながら、こう語った。

「ええ、生きた心地がしませんでしたよ。彼女の目を見た瞬間、まるで大紅蓮地獄に墮とされたと錯覚しました。」

それはそれとして、このエレベーター、どう見ても異常だ。降下速度はもとより、シャフト自体の広大さと深遠さ、何より数多の壁画。

イリヤは不意に、途轍もなく強大な砲身の中に居る様な不安に囚われた。刹那、光の柱が天を衝き月を穿つ様を幻視する。

(こんなバカげた妄想に囚われるなんて、ダメねコレじゃあ。これから重大な交渉をしなきゃいけないってのに。)

理由も根拠も何処にも無い。自分には直感や啓示のようなスキルは無いし、千里眼にしても未来視を可能とするランクでは無い。そう考えて、目先の交渉に意識を集中させる。

エレベーターが漸く停止し、軽快な電子音を発する。そして、扉が開かれた先には驚愕の光景が広がっていた!!?

「ようこそ！ 人類守護の砦、特異災害対策機動部二課へ!!」

「……………へ?」

「……………えつと……………」

シルクハットをかぶった偉丈夫が、その後ろには制服を着た職員達

が満面の笑みで歓待している。吊された横断幕には大きく「熱烈歓迎!!」と書かれ、各種縁起物に、テーブルに並ぶ料理の数々。

これにはイリヤも唾然とし、殆ど毒気を抜かれてしまいそうになった。そこに一人の女性が携帯端末を片手に歩み寄って来る。抜群のプロポーシジョンを誇る妙齡の美女なのだがマッドサイエンティストのオーラを感じる。そして何より、血のニオイがする。

「さあさ、笑って笑って。お近づきの印にツーショット写真♡」

「・・・その前に、コレ外して頂ける？」

手枷を外して貰い、それぞれの持ち物を返却して貰ったところで、改めて自己紹介の流れとなった。

「では、改めて自己紹介だ。俺は風鳴 弦十郎、ここの責任者をしている。」

見るからに屈強な男性で、世が世なら伝説の大英雄にもなり得たかも知れない、そんな印象を抱かせる人物だった。

「そして私は出来る女と評判の櫻井 了子。ヨロシクね♪」

響と未来の二人は、場の空気に吞まれて居るのかすんなりと迎合している。しかしイリヤとしては、信頼は出来ても信用し難い。まあどの分野であつても、突き抜けた研究者は大抵がそういうものだが。

「さて、君達に此処にお越し願ったのは他でもない。協力を要請したいことがあるからなのだ。」

「——協力、ですか。」

「ああ、そうだ。っと、その前にちゃんと説明しておかないとな。」

シンフォギア。それは聖遺物の破片から復元した程度の不完全な状態でありながら、一般人程度の身体能力しか持たない少女を超人に変貌させてのける代物。アンチノイズプロテクターとも呼称され、ノイズに対抗できる数少ない手段の一つ。ただし、汎用性に著しく欠ける。高い適性を有する人間の、心底から湧上がる歌唱が必須なのだ。一応、薬物の大量投入で適合数値を無理矢理引き上げることでも可能で

はあるが、使用者に尋常では無い過負荷を強いる為、実用的とは言い難い。

そんな物を見て軍事転用を考えない国家などまず存在しないだろう。そして、思い至った以上は試さずにはいられないのが人間の性である。

それが未だに為されていないのは、今はまだシンフォギア自体の数が少なく、使う事が出来る者もなかなか見出す事が出来ないからではない。その為のノウハウが蓄積され総数を増やすことが可能な段階に至れば、それを独占している日本から力づくでも篡奪しようとする国家が必ず出てくるであろう。

なにしろ、秘められた未知の力を解き明かすため、遙かな昔から様々な国が収集と研究を重ねて、其れでも尚、真価を発揮させる事が出来ずにいたのだから。多くの欠点が未だ残っているものの、どの国も喉から手が出るほど欲しいに決まっている。

神秘の薄れたこの時代において尚、これ程のものを生み出した櫻井了子は神域の天才であり、同時にこの御時世においては神代の天災と言えるだろう。

もつとも、シンフォギアでさえ全く通用しない化物も存在する。彼女らが人理の否定者と相見えるのはもう少し先の話。

「そして、現状において我々二課が保有しているシンフォギアは、翼の持つ第1号聖遺物『天羽々斬』、奏の持つ第3号聖遺物『ガングニール』の2つだ。」

本来、交渉の場に措いて、初手から手札をフルオープンなど愚の骨頂。そんな真似をしでかす相手など、逆に信用できないというもの。『切り札は先に見せるな。見せるのなら、さらに奥の手を持って』これは戦闘のみならず交渉の場においてもセオリーたり得る。

だが、目の前の漢はソレを、こうもぶつちやけるなんて!?!? 信じがたいにも程がある!!

「.....私、未だ要請を引き受けてさえ居ないのだけど.....」

「だが君は断らないだろうか? なにせ、相当なお人好しみみたいだから

な。」

イリヤとしては正直、不本意な評価である。自分は決して聖人君子の類いでは無いし、正義の味方をめざすつもりも無い。そう、これはあくまでも等価交換なのだ。

「わかりました。ただし、幾らか条件を付けさせて貰います。」

「うむ、聴こう。」

イリヤが提示した幾つかの条件を、二課長は二つ返事で受け入れていく。普通ならウラを疑うところだが、この筋金入りのお人好しが相手ではその手の心配をする方がバカらしくなってくる。

話が終盤に差し掛かったところで漸く、当然ながら尋ねられた。

「さうして、それじゃあ訊かせて貰いましょうか？ 貴女自身と、その能力について。」

## ドキドキ？ワクワク？魔術講座 1

この世には魔術と呼ばれる特殊技能が存在する。文字通りに魔力を用いて人為的に神秘・奇跡を再現する術の総称であり、それを成す事が出来る者達を魔術師と呼称する。とは言え、何でもありという訳では無く、等価交換が基本原則である。

魔術師は体内に魔術回路と呼ばれる擬似神経を有していて、自身の生命<sup>オド</sup>力を魔力に変換するのだ。魔術回路として機能している際は、生身の肉体が拒絶反応を引き起こす為に相応の苦痛を伴う。数が多いほど生成し扱える魔力量が多い。生まれながらに持ち得る数が決まっている為、増やす事は非常に困難。だが鍛える事で質を向上させる事は可能。術者の技量次第では自然界に満ちている星<sup>マ</sup>の息吹を扱う事も出来る。

魔術を起動させるための動作として最もポピュラーなのは呪文の詠唱だろう。魔力を通すだけで魔術を起動させる一<sup>シングルアクション</sup>工程から、十小節以上の詠唱を以って簡易的な儀式と為す瞬間契約<sup>テンカウント</sup>まで様々ある。予め用意しておいた何らかの媒体を使用すれば大魔術を即座に発動する事も出来る。

魔術師は押し並べて世を隠れ忍び、人目を憚る隠者である。なにしろ魔術とは神秘であり、神秘であり続けるから魔術たり得る。逆に言えば、大勢に知れ渡り常識に為ってしまった知識は、もはや神秘では無いが故に魔術たり得ない。それ故に、各流派の真髄は門外不出の秘奥であり、一子相伝とされる。

ちなみに魔術と魔法は別物と定義されている。その時代の文明において、手間暇と資金を掛ければ達成可能なものが魔術。不可能な、真正正銘の奇跡が魔法である。実際、魔法使い連中は何奴も此奴も人間を逸脱しちまつてる訳で。

「科学が未来に向かつて疾走しているのなら、魔術師は過去に向かつて疾走しているのだ。過去も未来も行き着くところは結局同じ。ゼロ<sup>宝</sup>に<sup>石</sup>向<sup>の</sup>かつ<sup>魔</sup>て<sup>法</sup>走<sup>使</sup>り<sup>い</sup>続<sup>い</sup>け<sup>い</sup>よ。」とは  
キシユア・ゼルレツチ・シユバインオーグの言葉だったか。

当然ながら個々人によって得手不得手な属性がある。西洋魔術においては一般的に、地、水、火、風、空の五大元素に架空元素の虚と無を加えた七つの種類を属性としている。無論これ以外にも特異な属性は存在するが、その場合は大抵が一芸に特化した異能者に為りがちである。

魔術属性とは別に、起源と言うモノが存在する。有り体に言えば、あらゆる存在が持つ、原初の始まりの際に与えられた方向付け。あらかじめ定められた物事の本質。無生・有生を問わず全ての物事は、抗えない宿命としてそれぞれ何らかの方向性を与えられて存在している。魔術師にとっては属性以上に重視せざるを得ない要素である。

「ここまででは概要の、さわり程度の部分なんだけど……ついてこれる？」

響はシンフォギアの説明の時点で既にオーバーヒート。未来は辛うじて理解に努めようと頑張っているが、限界っぽい。まあつい数時間前に、あんな目に遭っていたのだから仕方ない事ではある。

まあこの二人については想定内の範囲だし特に問題は無い。固有

結界内で

イリヤスワイール・フォン・アインツベルン サーヴァント

聖

杯

や英霊の概要は既に説明済みだ。細かい

部分はこれからじっくりと教えていけば良い。  
問題なのは

「ふむ……つまり、魔術を使えば我々のような人間でもノイズと戦う事が出来るようになる、と言う事か？」

「いいえ、残念だけど難しいと言わざるを得ないわね。神秘はより高位の神秘によって打ち消され、敗れた側は空想に堕ちるのが道理だから。私としても忌々しい限りだけど、ノイズを問答無用で否定出来るだけの神秘は極限られるわ。」

「でもお、貴女はその手段を有している。そうでしょう？」

やはり食い付いてきた。まるで獲物を見定めた毒蛇のような剣呑

な眼をしながら躊躇り寄ってくる。そして大型画面に映し出される、イリヤが『無限の剣製』を展開するシーン。

「先程も言ったけれど、魔術師にとって種明かしは致命的。切り札ともなれば尚更にね。まあ、今後は私もノイズ狩りに参加する事になるんだし、概要位は遠からず話すつもりだけど。」

そもそも、魔術協会で講義を受講した状態でも、普通は基礎だけで数年かかる。仮に詳細を一通り説明したところで、一般人では神秘を貶めるに足るだけの理解など先ず出来まい。

だが、櫻井 了子は違う。少なくとも固有結界を理解しているのだ。『無限の剣製』の核心部分にはいまだ至っていない様だが、それも時間の問題かも知れない。

「.....」

「両者の間には緊迫感、と言う程でも無いが似た空気が生じる。

その中で、風鳴 翼は意を決した様にイリヤに問う。

天羽 奏は薬物を過剰投与しノイズとの戦闘に臨む。この5年間、そんな事を幾度となく繰り返してきたのだ。おまけに、学業とアイドル活動もある。特に、最近は無常な程に立て続けにノイズが出現していた所為で、身体を回復させる暇も無かった。当然、身体はもう限界寸前な状態である。何とかしなければ、このままでは最悪の事態になる可能性が高かった。

風鳴 翼はイリヤの魔術に、何とか出来る可能性を期待しているのだ。切実に。

「.....結論から言えば可能よ。」

「!!本当かつ!?!」「!!本当につ!?!」

「自分だけで賄いきれないのなら、余所から持ってきて補うのが魔術師だもの。」

「頼むーアタシにその魔術を教えて欲しい。お願いだ!」

天羽 奏は頭を下げる。彼女のみならず、パートナーである風鳴

翼と、二課長の風鳴 弦十郎までもが。それに対してイリヤは暫し瞑

目し

「さつきも言ったけれど、魔術は常に死が付き纏うモノ。もし魔術師同士の争いに巻き込まれでもしたら、死んだ方がマシと思うような目に遭わされる事だってある。其れでも？」

「ああ！頼む！」

「・・・分ったわ、いいでしょう。・・・そうね、貴女には『宝石魔術』を教えます。正直、私の専門では無いけれど、それでも基本くらいなら問題ないし。」

「へえ、どんな感じの魔術なんだ？」

「簡単に言えば、その名の通りに宝石や鉱石なんかを触媒にする魔術よ。予め宝石に魔力を貯蔵させて、有事の際にその魔力を解放してブースターにするの。用意に手間暇は掛るし、宝石は基本的に使い捨てだからコストも嵩むのが欠点だけどね。」

「成程ね、確かにそれなら奏ちちゃんの身体に掛る負担も軽減させられるわね。なにせ、自分自身で生み出したエネルギーなんだから。無理な投薬と違って拒絶反応も殆ど無い。」

「あと、使ってるシンフォギアの来歴を考えると『ルーン魔術』の適性もあるかも知れないわね。」

「そう言えば、奏ちちゃんの『ガングニール』の本来の持ち主オーデインは戦争と死を司る神で、ルーン文字を考案する為に自分自身を神槍で貫いた状態のまま世界樹ユグドラシルの枝に縄を結んで首を括った、何て逸話があったわねえ。」

「へ、そうなのか。」

「本当に識らなかつたの？オーデインの逸話の中でもかなり有名なエピソードだと思うけど？」

「いやあ、アタシは使えてさえいればあんまり細かい事は考えないから。たははは」

まあ、諸々の詳細については、響と未来と一緒にこれから教えていけばいいだろう。と言うか、無理矢理にでも覚えて貰う。

「立花 響、小日向 未来、天羽 奏。貴方達3人には魔術を教えるに当たって最初に言っておかなければいけない事があります。いいで

すか？」

3人は姿勢を正し、固唾を呑む。

「魔術を学ぶということは、常識からかけ離れるということよ。死ぬ時は死ぬ。殺す時は殺す。私達の本質は生ではなく死だからね。魔術とは自らを滅ぼす道に他ならない。貴女達に教えるのはそういった争いを呼ぶ類のものよ。——だから一番大事な事はね、魔術は自分の為じゃなくて他人の為だけに使う、という事よ。そうすれば魔術使いではあっても、魔術師ではなくなるからね。」

それは奇しくも、かつて切嗣が幼き士郎に言った言葉と同じであった。

衛宮邸に帰り着いた頃には、夜明け間近となっていた。イリヤだけで無く、響と未来も一緒である。小日向家と立花家には既に連絡済みで、話し合った結果ほとぼりが冷めるまでの暫くの間は衛宮邸に住むことになったのだ。

3人とも揃ってとても疲れていた。布団を敷いたら秒で眠れるだろう位には。だがしかし、その前にどうしても話しておかなければならなかった。ハロウインの仮装用小道具にと用意したおもちやのス・テ・ツ・キと。

## フィーネ

愛は求める心。そして恋は、夢見る心だ。

恋は現実の前に折れ、現実には愛の前に歪み、愛は、恋の前では無力になる。

by ハンス・クリスチャン・アンデルセン

その部屋には幾多もの液晶モニターが設置されている。そして、その全てにある少女の様々な映像記録が映り、それらを名状しがたい面貌で睨め着ける一人の女。

櫻井 了子であると同時にフィーネを名乗る、黒幕といっても差し支えない存在。

フィーネは腹の中に溜まった鬱屈としたモノを根刮ぎ排除するかのよう深く息を吐いた。

「……よもや、な。ここまで明確に抑止力が介入してこようとは。」

Archerと名乗り、そう呼ばれていた少女。本名は衛宮 イリヤスフィール。

漸く明らかになった素性は、フィーネをしても驚愕に値するものだった。

極めて練度の高いホムンクルスをベースに、抑止の使者たる英霊との融合症例。詳細までは解りかねるが、そう見て間違いあるまい。厄介極まる存在だ。

有り得ない、等とは今更言わぬ。こうして実在を目の当たりにして尚、受け入れられぬ程にフィーネは愚昧では無い。

問題なのは、どう対処すべきなのか。

抹殺するだけであれば手段は幾らでも有る。だがしかし、そうすると次はより確実に潰しきれぬ様に、己の想像を超えるカタチで介入されるのは確実だ。

「・・・ならばいつその事、今は敢て泳がせるのも手か。」

今まで、凡そあらゆる方法で己が目的を挫いてきたシステム。それがここまで判りやすい一手を示すのは稀とさえ言える。

無論の事、抑止力の後押しを受けうる人間は他にも居るだろう。何しろ、この計画の内容を考えるのなら、人の理<sup>アラヤ</sup>だけで無く星<sup>ガイア</sup>の理<sup>ア</sup>まで敵に回りかねないのだから。それこそ、最悪の場合は真祖<sup>アルクエイド・ブリュンスタッド</sup>の姫君と対峙する羽目になる可能性すらある。或いは、  
キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ  
忌々しい宝石の魔法使用と。

「だが、それでも！私は決して諦めない！諦めて、堪るモノか・・・!!」  
悠久の時の流れの中で数多の挫折を味わってきた。何度も何度も、  
フィーネとして覚醒しては、結局果たす事が出来ずに終わってきた。

例えば、「バラルの呪詛」をすり抜け統一言語を習得していたゴドー  
ワード・メイデイ。不確かで曖昧な、情報とも言えぬ噂を頼りに苦心  
して探し回り、漸く玄霧 皐月の名で教師を務めていると判明した時  
には、既に死んでいた。その時の無念と後悔は筆舌に尽しがたかつ  
た。

或いは、英雄と呼ばれる者達に打倒された事もある。悪政を敷く暴  
君として、帝を惑わせる傾国の奸女として、悪鬼羅刹を束ねる妖の頭  
目として。

そんな事を幾度となく繰り返してきた。

「だが、今度こそ！——貴方の元に辿り着く!!・・・そうだ、それを邪  
魔するというのなら、容赦は、しない」

それはもはや狂気をも通り越して、怨念だった。

## カレイドステツキ

イリヤは痛感した。今の自分なら大抵の事からは2人を守護れるだろうと思っていたが、そんなものは慢心でしかなかったのだ。

いぎ窮地に陥って、感情が先立ち、視野が狭窄し、思考が硬直し、結果として親友達に重篤な心的外傷後ストレス障害を負わせた上に、完全に此方側に引き込む事になってしまった。

あのライブの1件から鍛練を重ねてきたが、実際にはつもりになっていただけでしかなかった。

こんな有様では、聖杯特権も心眼(真)も宝の持ち腐れと言うモノ。アインツベルンの一族は錬金術は突出しているものの戦闘行為自体に不向きであり、義弟にして錬鉄の英霊であったエミヤもまた戦う者ではなく生み出す者である。なんて言い訳にもならない。

だから

『みたいな事考えてるんでしょ、どーせ。まうったく、このイリヤさんも一人で抱え込んで泥沼思考に陥る悪いクセがあるみたいですねー。』

破戒すべき全ての符三段突き

『あだだだっ!!痛いですよ』

「……言いたい事は色々あり過ぎるくらいなんだけど、人のモノローグ勝手に捏造した挙句にそれを前提に話進めるの止めてくれる?」

『おやおや、違いましたか?』

たわけ…キサマの語る場所は既に——私が遙彼方に通過した場所だツツツ

『なあつ!?何時の間にグラップラーのクラス適性を?!』

という戯言はおいといて

「大体ねえ、何で貴女達中が在るの?私はいくまで側だけしか投影しでなかつただけど?」

『いや、何と言いますか…平行世界からちようど良い感じの器の気配がビビビっとしたんでえ、きちやいました♡』

なんとなく和服割烹着の使用人がてへぺろってる様が脳裏に浮かぶ。

「とにかく！正式な契約は未だなのね？」

『ええ。とは言え、わたしとしましては魔法少女はローティーンがベストマッチ！と思う次第でして、響さんはややズレてはいますが許容範囲内ですねえ。後は、性格的にも、相性的にも、潜在的にも中々の逸材ですし、何時れは正式に契約して（わたしにとっての邪魔者を悉く滅殺してくれる）最っ高にエキサイティングな魔法少女に

イラア（＃、010、）つ）☆多 9 hit

「生憎だけど、今の私には少々余裕が無くてね。だから、あまりイラつかせない方が身の為よ？」

『さ、Sir, yes, sir!』

掌の破戒ルイブルすべき全ての符とカレイドステッキ第二魔法礼装を見て、ふと思い出す。バーサーカーと共に柳洞寺に攻め入った祭に戦ったサムライと魔女。

サムライは純粋な剣術のみで多重次元屈折現象を引き起こしたかった。そして魔女メディア、バーサーカーとの戦闘時には重圧による援護をしていたし、対魔力のスキル対策として空間そのものを凍結させる結界魔術を行使していた。

そう、空間そのものを凍結させる結界魔術である。これはノイズに対して極めて有効な手段となるに違いない。

そして

たしかにカレイドステッキの特性ならばノイズ相手でも充分以上の効力を期待できるし、響と未来の戦力増強という点では非常に有用だろう。

仮にもかつての魔道元帥にして第二魔法使いたるキシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグが制作した特級の魔術礼装。その性能は正しく破格。生半可なサーヴァントなど圧倒し得る戦闘能力を使い手に授け、搭載されている機能も多種多様であり戦闘以外でも大いに役立つ。もつとも、それはあくまでもカレイドステッキが協力的かつ持

ち主が充分に使い熟せていた場合の話。サファイア（家について即刻ぶつ倒れた響と未来の面倒を進んで見てくれている）と未来のペアは割と無難な感じだが、問題はルビーの性格だ。響の単純一途さに付け込んで爆裂暴走させかねない。それだけで済めば未だマシで、最大の懸念事項は他に在る。そう、何が1番駄目かって言うと、ルビーとサファイアカレイドステツキが揃って単独顕現のスキルを持っているのがもう、厄ネタの香りしかない。

そもそも、あのノイズ群はほぼ確実に裏で操っている者が居た。所感ではあるが、マキリ・ゾオルケンにも匹敵するだろう策謀者。そんな相手に後手に回った時点で、どう立ち回ろうと無事では済むまい。一手毎に最善手を打ち続けたとしても、詰め将棋の様に追い詰められていっただろう。此方に固有結界<sup>J</sup>という伏せ札<sup>R</sup>が無ければ完敗を喫していた。

ノイズを操る正体不明の黒幕、特異災害対策機動部二課との関係構築、3人の生徒の教育指導、これだけでも充分頭が痛いのに、この上更に愉快型核爆弾を抱え込むハメになるなんて?!

イリヤもまた身心共に疲労困憊な状態で在るが故に、とんでもない発想に到ってしまう。

そうだ！今日の問題は、明日以降の自分に全部任せてしまおう！明日から本気出せばいいや。

うん、駄目だこりゃ・・・

イリヤや二課の面々は当初、フォニックゲインと魔力は言い方が違

うだけで同じモノだと思っていた。だが詳しく調べてみると、似ている様で微妙に違う。

マナやオドを原油とするなら、魔力がガソリン、フォニックゲインが軽油あたりだろうか。

ディーゼル車にガソリンを注ぎ込んだとしてもまともに機能しない。シンフォオギア<sup>シ</sup>にガソリン<sup>ン</sup>を注ぎ込んだとしてもまともに機能しない。下手をすればエンジン<sup>魔術回路</sup>が焼き付きジャンク<sup>再起不能</sup>逝きだ。天羽 奏が正にこの状態で、本当に壊れる寸前だった。ガングニール自体も痛んでいた。たのでこの機にオーバーホールするそう。

また、その逆に魔術礼装や投影宝具をフォニックゲインで起動させようとした場合、やはりまともに機能しない。

そしてフォニックゲインは想念の込められた歌唱からのみ抽出可能な特殊なエネルギーであるが、魔術回路を持たない者でも精製可能な様だ。

これはつまり、シンフォオギアからの攻撃を対魔力のスキルで打ち消せないし、アームドギアを破魔<sup>ゲイ</sup>の紅薔薇<sup>ジャル</sup>で消失させたりも出来ない。由々しき問題である。

ちなみに、シンフォオギアと魔術は併用可能で、風鳴 翼はシンフォギアを纏いながら忍法を行使することが出来ている。

イリヤの場合、魔力量は膨大だが、フォニックゲインは殆ど扱えない。聖杯特権を使えばある程度効率的に魔力をフォニックゲインに変換できるだろうが、アレは無<sup>切</sup>限<sup>り</sup>の剣<sup>札</sup>製の更に奥の手。乱りに多用して露見する様なリスクはなるべく避けたい。やっぱり空間凍結結界の完成を急がないと。

逆に六導 玲霞の場合、魔術回路は皆無だが、実はフォニックゲインは風鳴 翼と比べても大きな差が無いくらいだったりする。これが後々にある者に知られ大問題に発展するのだが、今は未だ皆の知らない話。